

く切られた銀髪になり、レース以外には肌の露出のないパンツ・ルックで、指揮のファビオ・ルイジと同化している。演奏もその飾り気のない容姿のまま、深い精神性を持つものだった。ピアノ協奏曲の第1楽章ではオーケストラと混じり合うまでに時間がかかったが、グリモアの落ち着いた集中力に引き込まれるようにはまり始め、第2楽章では劇場内の誰もが身動き一つできないような一体感に包まれた。第3楽章はフランス人らしい優雅さも見せ、様々な表情が複合された芸術作品を創り上げた。

前半でこれだけ満足させられると、後半の交響曲は難しいだろうと思いきや、こちらも真面目なロマンティックを聴かせ、歌劇場管弦楽団だからこそそのドラマ性をもって展開された。第4楽章ではブルックナーを思わせる音色も聴こえたが、マエストロズ（終楽章）は輝かしく、スリル満点の展開の末、豪華に締めくくられた。スペイン・ツアーでは、その周る先々で、フィルハーモニア・チューリヒの色を印象付けるに違いない。(中 東生)



ツアー関係は銀髪で挑んだ？グリモア ©中東生

Concert ツアーを控えたフィルハーモニア・チューリッヒとグリモアの公演

ふだんチューリヒ歌劇場のオーケストラ・ピットで縁の下の力持ち的存在のフィルハーモニア・チューリヒの、今シーズン3回目となるシンフォニーコンサートを1月14日に聴いた。エレヌ・グリモアをソリストに迎えたベートーヴェン「ピアノ協奏曲第4番」とチャイコフスキー「交響曲第5番」というプログラムで、この後すぐに同プログラムでのスペイン・ツアーが続く。

グリモアが登場した瞬間は目を疑った。アンニュイな影をチャームな顔に落とすヘア・スタイルだったのが、短